
精霊の子供の話(チノ)

かいと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊の子供の話^{チノ}

【Nコード】

N5397P

【作者名】

かいと

【あらすじ】

精霊が住む世界で生きる小さな子供の話。

主人公チノは特異な見た目と能力を持ち、両親には物心つく前に捨てられ、育ててくれた村でもその所為で冷たい視線に晒され、今は優しい>地王<の元で生活している。

優しくしてくれる相手を信じることができず、ただ後ろ向きになりながら生きている幼い子供の前に現れたのは、土色の髪をして赤い目をした少年だった。

主人公に性別が無く、一人称が『僕』です。

血液に関する描写があります。

サイトに掲載した話を推敲して投稿しています。

無与無奪

なんて、なんて。
醜いのだろう。

小さな存在でしかなかった、僕は。
何処にも、居場所がない訳では無いけれど。

+++

ここは、額に魔法石を持つ精霊が住む世界。

人間の世界よりも上にあって、神の居る世界よりも下にある、レニア・シャームと呼ばれる世界。

とても広大なこの世界に住む精霊達は、皆、自分の属性に合わせた活動をしながら生きている。

その属性にはとても多種類があつて、その数多の精霊達を、その時最も強い四人の精霊達が纏めていた。

大概、それは風、火、水、地の四種族の方々に、それぞれが王<の名前を貰っている。

そして、僕は、その中の一人、>地王<ウテン様の元にいた。
ウテン様の血縁者だったりするわけじゃない。

僕は、拾われたのだ。

「チノ」

凜とした、女性にしては低い声で呼ばれて、僕は読んでいた本を閉じて立ち上がった。

そして、声の主であるウテン様を見やる。

ウテン様は、大きなソファにゆったりと座ったまま、白い手をひらりと揺らして僕を手招きをしていた。

それに従い近付けば、僕を手招いていた動きが止まる。

金と黒で左右に色の分かれた髪は肩口へつくかつかないくらいで、こちらを見る目は銀色を宿していた。

「手を出してごらん？」

傍に立つたらそう言われて、恐る恐る手を開いて差し出す。

ソファの上に置かれていたもう一つの手がその上に伸ばされて、握られていた掌がゆっくりと開かれた。

長い指が触れそうになるのを、手を下げて避ける。

ぱとりと、綺麗な包みが落ちてきた。キャンディだ。

「美味しいよ、お食べ？」

につこりとウテン様が笑う。

僕は頷いて、視界を半分遮っている、自分の頭に巻かれた包帯越しに左の頬に触れた。

緩んできたのか、少しずれる。

外れてしまわないように押さえながら、頭を下げて退室した。

読みかけの本を置いて来てしまったけれど、そのまま、自分の部屋として与えられた場所まで歩く。

入った場所には、カーテンの引かれた窓が一つと、ベッドが一つと、本の詰まった棚が二つ。

小さな机と、その上に一輪挿しと花。
それから鏡。

入ってすぐに扉を閉めて、キャンディはベッドに放って、鏡の前に立った。

見上げる程に大きい、僕の頭からつま先まで映す鏡だ。その前で、僕は両手を使い、ゆつくりと包帯を外す。額までを覆っていたその包帯の下に、怪我など無い。頬と共に隠していた左の目にも、異常は無い。

ただ、僕には普通の精霊にあるものが無くて、無いものがあつた。

「……っ」

泣きそうになって歪んだ自分の顔が、鏡に映っている。

どれだけ鏡の前で目を凝らしても、何も変わらない。

僕には、魔法石が無い。

精霊ならば誰もが持つている、精霊の証が無い。

どうにか伸ばした前髪で隠しているこの額には、在るべきものが無い。

精霊の、出来そこない。それが僕だった。

指で、ゆつくりと額を撫でる。

平らなそこに更に泣きそうになりながら、その手を、そのまま左の頬へと滑らせた。

指先で触れたそこには、まるで墨で書いたような大きな痣が存在している。

奇妙な、まるで文字のようにも見えるその痣を、呪われた印だと初めに言ったのは誰だっただろう。

それは、僕の体質とも重なって、そのまま穢れの証になってしまった。

皮を剥こうと、火で焼こうと、すぐに甦る痣。

それは確かに、呪いとは思えないほどだった。

『ほら、あいつを見ろよ』

『寄るなよ、触ったら腐るかも知れないぞ』

『穢れた声で話しかけるな!』

子供の、大人の、無邪気なまでの悪意と嫌悪と憎悪が脳裏を過ぎる。

僕は、鏡の中の顔を見詰めながら、ゆっくりと頬に爪を立てた。伸びた爪が、簡単に肉へと食い込む。

呪いの印を抉るように手を引けば、そこには簡単に傷を作った。痛くて顔を顰めた僕の頬から染み出したのは、汚らしい赤い血だ。手で押さえることもなく振り返り、机の上を見やる。

その上には誰が置いたのか分からない花が鎮座して、こちらを向いていた。

机へと歩み寄り、そのまま手を伸ばす。

そうすれば、指が触れる前に鮮やかな黄色い花が変色し、枯れて花びらを落とした。

触れることなく手を戻しても、もうどうしようもない。

その一輪挿しにあるのは、枯れてしまった花が一つだけだ。

僕は鏡の方へと目をやった。

先程よりも醜く顔を歪めた子供が、そこにいる。

先ほど、確かに付けた頬の傷は、もう跡形もなかった。

鏡の中には、全ての命を飲み込んで貪欲に生きる、呪われた化物が一人だけ。

今にも泣き出しそうな顔が、少しだけ可笑しかった。

お腹が空いたので、ウテン様に貰ったキャンディを口に放り込んだ。

カラコ口と口の中を転がるそれは甘い。
窓から見える空はまだ青かった。

きっと、まだまだ一日は長いに違いない。

僕は、自分の顔を左半分隠すようにして包帯を巻き、決して解ける事の無いように、きつくきつく止めた。

痣と額が誰にも見えないことを鏡の前で確認してから、そのまま部屋を出る。

外へ行こうと思って廊下を歩いていたら、ウテン様が部屋から出てきたところに重なった。

「おや、チノ。出掛けるのかい？」

綺麗な声を追って、僕は顔を上げる。

中央の分け目から左右に金色と黒に別れた、あまり長くない髪と、月みたいに輝く銀の双眸。

ウテン様の瞳。

こちらを見るそれから目を逸らし、頷いた僕は、ぶつからないように気を付けながら駆け出した。

後ろから向けられている視線に気付いても、振り返ることなんてできない。

どうして？

ウテン様、どうして。

どうして、そんな目をするの。

ウテン様の館は広い平原の真ん中であって、僕はその中から飛び出して懸命に走った。

それで、息が出来ないくらいに走った頃、ようやく道へ辿り着く。そこでやっと足を弛めて、後ろを振り向いた。

遠く、ただ広大な平原の真ん中に、館が一つ。

あんなに寂しい所にあの人がいるのは、きっと僕の所為だ。軽く唇を噛んだ。

本当は噛み千切りたいけれど、それは出来ない。

僕は安易に怪我など出来ない。

視線を前に戻した。

いつも歩く道を見つめながら歩く。

もう少し行けば、大きめの河がある。

あまり人の気配の無い、静かな場所だ。

今日はそこで過ごそう。

そう決めて、弾んでいた息を整えながら歩き続ける。

その内に、道の回りに木が立ち並び始め、そしてそれが森になった。

レニア・シャームと呼ばれるこの世界はとても大きくて、全てを歩いては回れない。

大体が、風の精霊に頼んで連れて行って貰う。

でも、呪われた僕に関わりたくない精霊なんていないだろうなとも、思った。

それに、別にそこまで遠くへ行きたいわけでもない。

森の中を伸びるなだらかな道は、丁寧に整備されていた。

木々が道を避けて並んでいる。木の精霊が作った道なのだ。

大木が手を広げる下を、僕は歩いていく。

やがて、目の前が開けた。

そこに広がるのは、緩やかに流れる河と、広く、丈の長い草の森めく土手だ。

膝までもある草を、申し訳く思いながら踏んで、するすると土手を滑り降りた。

ここの草はとても滑りやすく、いつも登る時に苦労する。

でも、僕はこの辺りが嫌いではなかった。

降りた先は砂利だらけの河原があつて、流れて角の取れた石や砕けた砂が敷き詰められていた。

座つて、石の一つを手取る。

少し尖つた、角の取れ方の足りない掌くらいの大きさの石だった。それから、柔らかな砂地に、石で文字を書く。

チノ。

僕の名前だ。

それから、ウテン様の名前、『家』、『木』、『森』。

たくさんの言葉を書いては消し、それを繰り返す。

「おわあ!？」

しばらくして、突然、大きな声が上がった。

驚いて飛び上がる僕の後ろで、何かが落ちる音がする。

振り返ると、石や砂の上で、僕と同じ年くらいの男の子が一人、寝転んでいた。

草に塗れていて、ぴくりとも動かない。

もしかして、草で滑って転がり落ちたのだろうか。

そろりと、僕は男の子に近寄った。

土色の長い髪が顔を覆っていて、その風貌はよく分らない。

その頭から、鮮やかな赤い水が染み出してきた。

血だ。

僕は目を見開いて、慌てて周りを見た。

勿論、人なんていない。
どうしよう。

早く、治療が出来る人の所へと連れて行かないといけない。
傷を治せるのは、水の属性かそれに近い系統の属性の精霊だ。
けれど、僕はここからどのくらい近くにその人達の家があるのか
も分からない。

近いのか遠いのかも知らない。
ウテン様なら分かるだろうか。呼びに行こうか？
思いながら土手を見る。

急斜面で良く滑る草を生やしたそこは、僕の嫌いではない場所だ
けれど、ここから上がるのにどれだけ掛かるだろう。

駄目だ、行つて戻つては間に合わないかもしれない。
なら、背負つていったらどうだろう？

幸い、嫌がるだろう彼は気を失っている。

短時間なら、僕の呪いが移ることも無いかもしれない。
思いながら彼を見下ろし、そしてふと自分の手を見て、僕は言葉
を失った。

多分、驚いた拍子に、石を強く握っていたんだろう。
傷が出来ていて、汚らしい血が零れている。

こんな手では、彼に触れもしない。
ただでさえ彼は怪我をしているのだ。

だったら風の精霊を呼びたかったけれど、その呼び方すら知らない
のだという事に今更気付いた。

でも、じゃあ、どうしたらいい？
僕は目を閉じ、無力な自分を恥じて唇を噛んだ。
今度は強すぎて、血の味がする。

これで、更に生き物に触れることが出来なくなった。
土手を駆け上っても、その間に何本の草が枯れるだろう。
どうしたらいい？

途方に暮れながら、目を開けた。

「……?!」

そして、息が止まるほどに驚いた。

目の前は、河原では無かった。

土手でも無かった。

そこには、家があった。

僕が唯一知る、ウテン様の館があった。

どうしてだろう。

戸惑いながら、周りを見回す。

いつも通りの、広大な草原だ。

そして、あの男の子と僕は、その草原の真ん中、ウテン様の館の前に居た。

館が、やって来たのかも知れない。

適当に、でもそれ以外の事など考えつかなくて、そう結論を付け

た僕は強く扉を叩き、ウテン様を呼んだ。

ウテン様は、すぐに来てくれた。

++++

僕が扉を叩く音を聞いて出てきたウテン様は、男の子を抱え上げて中へと連れて行ってしまった。

その時に、その子の顔がちらりと見えた。

整った顔は血塗れだった。

でも、すぐに止血してもらえらるだろう。

ウテン様は暇になると薬品を調合していて、止血剤でも何でも持

つてる筈だから。

とにかく僕は、目を覚ました彼が僕を見つけないようにと、館の裏側へと回り込んだ。

ただでさえウテン様には来客が少ないのだから、せめて、あの男の子が目を覚まして嫌な顔をしなければ良いと思う。

草が避けて大地を晒しているそこには物乾し場があつて、今は何も干されてはいない。

使い女さんはもう取り込んで帰ったんだな、と思いながら、そのまま地面に座り込んだ。

そして、自分の中途半端に長い髪を摘む。

少し引くと、ちよつとの痛みと共に小さく音を当てて、何本かの髪の毛が頭皮から逃れていく。

重力で手にまとわりついたそれを適当に放ると、丁度吹いた風が何処かへと連れ去つてしまった。

もう何処へ行つたのかも分からない。

それから掌を返して、血に濡れて汚れた傷を見た。

ここからいっぱいこれが出れば、少しは綺麗になれるだろうか。

僕なんて、死んでしまえば良いのに。

ぼんやりと、そんなことを思った。

もし、こんな出来損ないの呪われた子供の拾わなかったら、きっとウテン様だって、もっと晴れやかな顔をしているに違いない。

みんなだって、嫌な顔をせずにすむし、それに。

それに。

「……」

膝を抱えて、俯いた。

僕は口を開いてはいけない。

不快にさせるから。

僕は触れてはいけない。

不快にさせるから。

いつそのこと、存在しなければ良いのに。

でも、僕はここにいて。

自分で死ぬだけの度胸も無くて、殺されに行く根性も無くて、何も出来なくて。

何もなくて。

どうせ世界を作り上げるのに何の役にも立たない小さな存在なら、無くたって良かったのに。

鬱々と考えていたら、視野を大きな影が横切った。

それから、少し遅れて強い風が吹く。

まるで、何かが空を横切ったようだ。

なんだろう。

僕が顔を上げて見たのは、雲も無い青空だった。

何もない。

でも、確かにさっきは何かが通った。

何だったのかを確かめたくて、空を見上げ続ける。

そうしたら、何秒か何分か何時間かが経った後で、それがばさりと羽ばたきながら現れた。

大きな体と、蝙蝠のような羽、長い首。

それは、精霊の住むこの世界にたった一つの存在である竜だった。

そしてその背には、人が二人乗っていた。

赤く、炎を思わせる髪 of 男の人と、さっきの男の子。

息を飲んだ僕の目の前で、一際大きく羽ばたいた聖なる生き物が、そのまま先ほどとは逆へ飛び去っていく。

あまりの速さに、すぐにその姿は見えなくなってしまった。

「……」

良かった。

ほぅ、と、息を吐く。

あの男の子は、目を開けていた。
顔色は悪くなさそうだった。もう大丈夫なのだろう。
竜の背に乗って、笑っていた。

「……チノ、もう中にお入り」

何処からともなく、ウテン様が僕を呼ぶ。
顔を上げると、裏側にたった一つある二階の大きい窓から、ウテン様がその顔を出していた。

ウテン様の表情は、いつもと同じだ。

ここからだって見える、分かる、その銀色の瞳。
ねえ、ウテン様、どうして。

どうして、その銀の目には憎悪が無いの。

そうやって、まるで手を差し伸べるような、柔らかな眼差しをするの。

僕は、汚らしくて汚らわしくて恐ろしい、ただの化け物なのに。
いたたまれなくて、目を逸らす。

そして、ウテン様の言葉に従って立ち上がり、歩き出した。
歩きながら、また空を見やる。

もちろん、そこにはもう、竜もあの男の人も、あの男の子も居ない。

あの子が笑っていて、良かった。

先ほどの、竜の背中にいたあの子の笑顔を思い出す。

あの時、触れなくて良かった。

あの子が呪われなくて良かった。

笑ってくれて、良かった。

正面に戻り、扉を開くと、玄関までウテン様が出迎えに来ていた。
立ち止まって、ウテン様を仰ぐ。

「奥にお茶を用意してあるよ。……薬を持って行くから、先に行っ

て飲んでおいで」

途中の沈黙は、僕の唇と手を見ての言葉へと続いた。
僕は頷いて、綺麗なその人を避けて、中へと入る。
どうして、ウテン様。
どうして。

僕に期待させようと、するの。

+++

小さな存在でしかなかった、僕は。
何処にも居場所がない訳では無いけれど。
でも。

全ては移ろうから。
表と裏は入れ替わりやすいと知っているから。
どうか。
お願いだから。

僕に何も与えないで。
何も、いらなから。
僕から、何も奪わないで。

汚泥の掌

僕は、いつだって。

憎まれてた。

蔑まれて当然の、化け物だから。

+++

部屋から出たらその人が目の前に立っていて、僕はただ漠然と、失敗してしまった、と思った。

見上げた先では、首が痛くなる位に上背のある、黒い長髪の男の人が微笑んでいる。

「やあ、こんにちは。チノちゃん」

そう言ってその人は大きな手を僕へと差し出してくる。

それを握り返す事なんて勿論やっちゃいけないから、僕はほんの少し後ろへと下がって、深く頭を下げた。

頭の上で苦笑したような気配がして、そして、僕が頭を下げている間に、その人は僕の前から立ち去っていった。

足音が、奥へと続く廊下に響いている。

その音を聞きながら顔を上げて、そちらを見た。

大きなその人は、どうやらウテン様の書斎に向かったようだ。

その顔をこちらへ向けることなく、その手が開いた扉の内側へと、その姿が消える。

それを見届けてから、知らず詰めていた息を吐いた。

あの人は、>風王<のセイクウ様だ。

今日ウテン様に会いに来るのだと聞いていたから、出逢う前に家から出ようと思っていたのに、遅れてしまった。

だって、セイクウ様はウテン様のお友達だ。

そんな人にくらいは、嫌な想いをさせたくない。

僕なんかに会ったら、その日の気分は最悪だと思う。

計画が失敗したことにがっかりしながら、僕は傍らに抱えていたスケッチブックとクレヨンの入った鞆を背負う。

とにかく、帰りまで会ったりしないように、早く出掛けてしまおう。そう決めて歩き出した。

そんなに距離はない廊下を歩き、玄関から外へ出る。

見上げた空は晴れていて、ずっと向こうまで青空が続いていた。今日は、何処へ出ようか。

踏み固められた小さな道を歩き出しながら、そんな事を考えた。

出来れば、誰も居ないような所が良い。

そうすれば、誰も僕には会わない。

とすれば、やっぱり、あそこだろうか。

頭に浮かんだ場所に、少し考えて頷いた。

そつだ。あそこが良い。

目的地が決まったので、歩く方向を変える。大きな集落へと続い

ていく道を逸れて、右へ。

出来るだけ草の少ない所を選びながら、黙々と歩く。

ここは、精霊の治める世界、レニア・シャーム。

神様の居る世界よりは低く、人間の居る世界よりは高いところに在る、広い世界。

あまりにもこの世界は広くて、更に僕はウテン様の館からあまり離れたことが無いから、行った事の無い場所はたくさんある。

僕が今目指している場所も、ほんの数日前まではその一部だった。数日前に、いつもの道から逸れて発見した、小さな丘だ。

背中に森を構えたそこは、ウテン様の館から少しだけ離れた場所にあつて、だからあまり近づく人は居ないようだった。

ウテン様の館には僕が居るから、殆どの人はあの館に近付かない。そんな事を考えながら足を動かしていたら、ふと足場が昇りになり、足を止める。

着いた。

嬉しくなりながら、丘を駆け上る。

そして、森に背を預けた丘の頂上ではなく、その中腹で後ろを振り返る。

ここからの眺めが、僕は嫌いじゃなかった。

自分の身長では絶対に見渡せない遙か彼方まで、見ることが出来るからだ。

綺麗な物を見ることが出来ると、それだけで少しだけ、嬉しくなる。

自分が変わっていくような気がする。

もちろん、それは気のせいなのだとは、知っているけど。

ふう、と息を吐いて、鞆からスケッチブックとクレヨンを取り出す。

何を描こうか。

そんな風に思っていると、不意に、丘の向こう側で足音が聞こえた。

走ってきたような音だ。

こちら側まで来るかと身を竦ませたけれど、そうはならず、音が止まる。どうやら、座ってしまったらしい。

ここに人が来るなんて。

僕は少し眉を寄せた。

見つかる前に、立ち去った方がいい。

顔を見られて、嫌悪の表情を浮かべられるのは苦手だ。

そう思っ、鞆にクレヨンとスケッチブックを入れようとしたとき、突然強い風が吹いた。

「……！」

驚いて目を見開いた僕の手から、スケッチブックが風にあおられて飛ぶ。

それは僕の後方、丘の頂上付近まで運ばれて、音を立てて落ちた。慌てて駆け寄り、それを拾い上げる。

音が聞こえていないと良いけれど、思わず丘の向こうへと目をやると、そちらに居たその人が振り返った。

ぱちりと、目を見開く。

土色の髪。赤い、燃えるような瞳。健康的な色の頬。

その人は多分僕と変わらない年の男の子で、僕はその顔を知っていた。

この前、土手で怪我をしていた子だ。

頭から血が出ていたけれど、今はもう大丈夫らしい。頭に包帯などとは無かった。

良かったと思いながら、それどころではないと胸の内で首を振る。早く、立ち去らなくては。

「あの……」

そう思った時に、彼が口を開いた。
驚いて、思わず後退る。

それを変に思ったのか、男の子がこちらへと体の正面を向けたので、更に一步下がってしまった。

不思議そうな目に、申し訳なさが胸一杯に広がる。
だって、しょうがない。

近付いて、侮蔑の言葉を投げつけられる方が、痛い。
僕の胸の内をよそに、ふ、と彼は微笑んだ。
その瞳に宿った光に、僕の体が戦く。

「……こんにちは、えっと……チノ、さん？」

どうして、僕の名前を知っているのだろう。
ウテン様に聞いたのだろうか。

「この間は、助けてくれてありがとう」

彼が言う。

別に、僕は助けたりなんてしていない。

だって、僕が触ったら死んでしまうかも知れなかった。
だから、手当すらしていない。

ただ、ウテン様をお願いをただけだ。

けれどそれを知らないのか、彼の笑みが更に広がり、その手が僕を
手招きした。

「良かったら、こっちで、一緒に座りませんか？」

そんな風に聞かれたら、困ってしまう。

僕としては今すぐ逃げ出したいけれど、そうしてしまったら傷つく
だろうか。

更に嫌われるだろうか。

どうしようかと迷って、結局断れずに、僕は彼の方へと少しだけ近付いた。

彼から、大人が姿勢を崩して三人ほど座れる位の距離を開けた地点に、そつと腰を下ろす。

これ以上近付いたら、彼が不愉快に思うかもしれない。

何故か彼はずっとこちらを見ていた。

その視線を感じながら、スケッチブックを膝に立てかける。

そうしてクレヨンを取り出して、その中から青いクレヨンを手に取った。

それで、スケッチブックの一カ所に、まず円を描く。

それから、円を描くように、ゆっくりスケッチブックを塗りつぶしていく。

時々方向を変えて、僕が其処に描いたのは空だ。太陽は色が難しいから、とりあえずは青空から。

そうしていると、ふと少し離れた位置に座っていた彼が、僕から視線を外し、ぱたりと草の上に寝転んだ。

その分少し近くなってしまい、思わず肩を竦める。

けれど、それ以上彼に動きは無く、別に意図した事ではないだろうと結論して、僕は止めてしまっていた手を動かした。

青クレヨンが、白いスケッチブックに広がって空になる。

「チノ……さん」

ふと声が掛けられたのは、空の絵があと少しで終わりそうになった時だった。

絵と言っても、まだ青い色だけ。後は太陽だ。

手を止めて目を向けると、彼は寝転んだままこちらを見ていた。

その瞳はまっすぐで、ただ、純粹に光を放つ聖火の色をしていた。窺うように見てしまった僕に、彼は微笑みを浮かべる。柔らかく

優しいそれに、僕は肩を竦めた。

僕は、その類の態度が、一番苦手だ。
とっても失礼なことだと思っけれど、仕方ない。

「チノ、さん」

彼は僕の名前を繰り返し、寝転んだまま僕へと手を伸ばした。
その指先が近寄ってくるから、僕は少し体を動かして、近付いた分だけ離れる。

どうしてそんなことをするんだろう。
触られたら、どうしたらいい。触って、嫌悪を浮かべられたら、苦しくなるに決まってる。

初めから傷付けられると分かっていたら、それを避けようとするのは当然のことだ。

僕の動きに、彼の手が止まった。
そのまま手は下ろされて、彼がゆっくりと起き上がる。
その顔が、まっすぐに此方を見ていた。

「チノさん」

そんな風に呼ばれても、どう返事をしたらいいのか分からない。
僕は少し困った顔をしてしまったのだろうか、ふと何か考える顔をした彼が、もしかして、と訊ねた。

「しゃべれないんですか？」

率直な問いに、首を振る。

どうしてそんなことを訊くのだろう。
戸惑いながら、スケッチブックを捲り、真っ白なページを前にする。

青のクレヨンを置いて、代わりに黒いクレヨンを手に取った。
そして、紙面の上に文字を書き、少し歪なそれをそのまま彼へと
向ける。

『話してはいけないから』

こうすれば、彼に僕の声を聞かせないで済む。
どうしてもだか、土色の髪が揺れて、彼が首を傾げた。

「どうして？」

それは僕の方が訊ねたい。

僕は、同じように少し首を傾げてから、返答をまた新しいページ
に書き付ける。

そして見せた。

『だって、いやでしょう』

「何が？」

『僕は忌み子だから』

じつと、僕は彼を見つめた。

忌み子。忌まわしい子供。

そう呼ばれるようになったのは随分と昔で、ウテン様に貰った『
チノ』よりも、僕にぴったりな気がしていた。

すぐにスケッチブックを自分の方へ戻して、更に言葉を続ける為
に文字を書く。

『石も無い』

僕の額には、精霊の証すら無い。

『力も無い』

本来生まれ持つ筈の、属性を備えた力の欠片すら無い。

『種族も無い』

家族も、いない。

僕は気付けば一人だった。

そうしてウテン様が拾ってはくれたけれど、それでもきつと、これからも一人だ。

『呪われた子供だから』

そこまで書いて文字を見せた時、彼は僅かに眉を寄せた。

不快な思いをさせてしまったなら申し訳ないと、思いながら文字を綴る。

『気味が悪いでしょう』

そう書いて見せてから、ああ、少し違うかなと、思って書き直した。

『気持ち悪いでしょう』

触られたら死ぬとか、声を聞いたら呪われるとか、そういう噂がされている事くらいは知っている。

そして、それは半分事実なのだ。

僕が傷付いているときに僕へ触れたら、その人は死んでしまうかもしれない。

じっと見つめた僕の視線の先で、赤い瞳をした彼が、ぐ、と息を詰めたようだった。

その顔に浮かんだ色に、僕は戸惑ってしまう。

あまり見たことの無い感情が、彼の顔にあった。

それは、勿体ないくらいにウテン様が向けてくれる微笑みとか、当たり前なくらいに周囲から与えられる侮蔑とか、そういった物ではなく。

怒りに、見えた。

『どうしたの』

問うためにクレヨンで綴る。

それを目で読んだ彼は、いよいよ眉を寄せて、何かを堪えるように口を引き結んだ。

そしてそれが決壊し、その口から声が漏れる。

「……んで……！」

震える声その白い喉から漏れて、吐き出される。

「……何で……！」

それを発している彼の瞳に、大きな雫が宿った。

「何で！」

叫ぶように吐き捨てられた声と共に、感情の籠もった一滴が彼の

頬を伝って落ちる。

それを追ってまた落ちていくその雫達を、僕はただ見つめていた。どうして、泣くんだろう。

戸惑って、睨みつけてくる聖火色の瞳に堪えきれず目を伏せる。見下ろした先には、白いスケッチブックと握りしめた黒いクレヨン。

彼はまだ泣いているようで、喉から僅かに発される声と、掠れた息が聞こえていた。

何処かに行った方が良かったけれど、その所為で更に不快になられたらいやだとも思って、結局どうにも出来ずに、僕はその場に留まった。

彼が何に怒っているのかが、まったく分からない。

戸惑うまま、白いスケッチブックに黒いクレヨンで小さな丸を描く。

真っ白いスケッチブックの上に、ただ一点の黒。

これが、僕だ。

指先でそれに触れながら、ゆっくりと目を閉じた。

まだ、彼の泣いている気配がする。

こうして、気持ちをぶつけられるのも、困ってしまう。

どうしたら良いのか分からない。

ウテン様の、笑みも。

侮蔑だけならまだ良かった。

嫌悪だけならまだ良かった。

まるで汚したくなかった掌に汚泥を塗りたくられたみたいで、視線だったなら。

だって、そういう感情なら向けられ慣れている。

でも、彼のようにまっすぐな感情は、それだけで駄目だ。

僕には受け取る権利も無いのに、どうしたら良いのか分からない。ちよっとだけ目が熱くなって、瞼へ力を入れた。

ゆっくりと、時間が過ぎていく。

細く、彼が息を吐く気配がして、見動いて、何かに気取られて息を呑んだようだった。

それを聞いて、どうしたのだろうと目を開く。

少しぼやけた視界の中で、炎の色をした双眸がこちらを見ていた。

「……チノ、さん……」

囁きは小さく、慣れてきた目に、しまった、と自己嫌悪をしている彼の顔が見えてくる。

どうしたのだろうと、思いながら見つめていると、彼は俯いた。

それから、その歯が下唇を噛む。

拳が自分の目元を拭って、その涙を擦り落とした。

「……チ、チノ、さん」

そして僕を呼び、顔を上げて少し間を詰めてくる。

あれだけ伝えたのに近寄ってくる彼を、僕はぼんやりと見つめた。じりじりと近寄った彼は、僕の前に顔を寄せて、囁くように口を動かす。

「チノさん」

聖火色の瞳の中に、汚れた黒の髪と右目を覗かせた僕が反射されていた。

どんな表情をしているのかまでは、分からない。

「……チノさん」

彼が、そっと、呟く。

「僕、……………俺。俺、カエンって言います」

そつと名乗って、彼はじつと僕を見つめた。
何かを窺うようなその視線を見返してから、僕はスケッチブックを捲り、新しいページに、クレヨンを滑らせる。

『きれい。炎の名前だね』

僕の文字に、彼は顔を歪めた。

まるで泣き出す寸前のような顔に面食らって、僕は慌てる。

何か、酷く傷付けるようなことをやってしまったのだろうか？

けれど、先程のように涙を零すことなく、カエンと名乗った彼は一度俯き、そしてすぐに顔を上げる。

その顔には、春先に見つける日差しのような笑みがあつて。

目がくらむような眩さに、次に顔を背けたのは僕だった。

どうして、そんな目をするのか。

そう問い掛けたかったけれど、どうしても、それは、出来なかった。

+++

僕は、いつだって。

憎まれてたじゃないか。

そうだった、じゃないか。

ぼくは、てをひろげた

傷付きたくなくて

傷つけられたくなくて

拒んで

強く強く閉じた目を

強く強く抱えた膝を

そつと、

ほどけば。

+++

「おい、チノさあーん」

窓の外から声が掛かり、僕は本から顔を上げた。

風が吹いて翻るカーテンへ近付き、二階の窓から顔を出す。

下から、僕へと向かって、元気よくぶんぶん腕を振る人影があった。

淡い土色の髪と、炎の色をした瞳を持っている少年。
カエンだ。

「遊びに行きませんかー」

近くで見たらきつと目が潰れるだろう程に眩しい笑みを浮かべて、彼は言う。

小さく頷いて、それからすぐに窓辺を離れた。
待たせたらいけない。早く行こう。

ほんの数日前、僕は丘の上でカエンに会った。
それまでは接点なんてなかった。

土手を転がり落ちて気絶していたカエンを見つけたのは僕だけど、あの時は会話すらしていない。

それで、丘で会ったあの日、何故か、泣かれて。

彼の聖火と同じ色の瞳から零れた涙は、とても綺麗だった。

その後、何故だか僕に笑いかけてくれた彼は、それからどうしても僕の前で、彼は笑う。

太陽みたいに眩しくて、いつも僕は目を逸らすけれど。

「おや、チノ。出掛けてるのかい？」

廊下を駆けて行くと、ウテン様が応接間から声を掛けてきた。
開け放された応接間のソファに座る相手に、僕は立ち止まり、頷いて答える。

僕の仕草に、ウテン様は何故か目を細めた。

「……あまり、遅くなったら駄目だよ？ 心配するからね」

囁くのは、優しくて穏やかな声だ。

目を上げることが出来ずに、ただ頷くことを繰り返す。

そして、一度頭を下げてから、また走った。

袖を引っ張って、自分の素肌が触れないようにしながら玄関のドアを開く。

カエンは、玄関の前で待っていてくれた。

風が吹いて、土色の長い髪を揺らす。

括つてもいない無造作な髪を少し邪魔そうに首を振って後ろへ追いやり、炎色の目が見えた。

「支度、速いですね」

笑んだ声は柔らかい。

カエンは僕へ近付いて、首を傾げながら僕の顔を覗き込んだ。

「今日は、湖と森と、どっちが良いですか？」

二つにまで絞り込まれたその選択肢は、これから僕達が行く行き先だ。

僕は、ただ曖昧に首を振る。何処でもいい。カエンが選んでくれればいい。

カエンは、ちょっと困ったように笑った。

「……じゃあ、湖に行きましょうか」

そう言つて、カエンは歩き出した。

僕はそれについて行く。

少しだけ離れて、でも、あまり離れ過ぎたりせずに気をつける。何かをカエンが話しかけて、それに僕は頷いたり首を振ったりし

た。

話している間、カエンは僕の方を見るから、それで会話は成立する。

声を出さないですむことに、僕は、酷く安堵していた。

やがて、そうしながら歩いていった僕達は、湖に辿り着いた。

日の光を水面が弾いて、魚がいるのかあっちこっちで波紋が出来ている。

「やっぱり、ここは綺麗だ！」

カエンは声を上げて、靴だけ脱いで湖の方へ駆けた。

ズボンの裾を濡らしながら、冷たいと叫んで、楽しそうに笑う。

それは、水面が弾く陽光と混じって、とても眩しい。

そう、とても。

「……チノ、さん？」

目を伏せた僕に気付いて、カエンがこっちへ近付き、顔を覗き込んできた。

「チノさんも入りませんか？」

気持ち良いですよと言う囁きに、首を振る。

こんなに綺麗な湖に僕が入って、汚れてしまったら申し訳が無い。魚だっていい気はしないだろうし、カエンだって、もう入る気がなくなるかもしれない。

折角、あんなに楽しそうだったのに。

僕の答えを見たカエンは、僕へそれ以上勧めなかった。

ただ少しだけ困ったように笑って、そのまま一度湖へと戻る。

それから、湖の水を両手で汲み上げて、こっちへとやって来た。

「チノさん、手を出して？」

言って、カエンも手を出す。

戸惑いながらその下に手を差し出すと、カエンが、器のようにしていたその手を開いた。

指や掌の間から冷たい水が零れて、僕の両手に降り注ぐ。
冷たい。

濡れた手を見る僕に、カエンは笑う。

「ね？ 冷たくて、気持ち良いでしょう？」

その笑みは晴れやかで、煌めく水面にも似た眩しさを持っている。
僕は、ゆっくりと目を伏せた。

キラキラと綺麗な聖火の瞳。
柔らかで優しい声。

それらはとてもとても眩しくて、僕はいつも、目を逸らす。

カエンは、湖の方へ戻った。
水を弾いて、楽しげに笑う。

僕は、その姿を見てから、綺麗な水に濡らされた醜悪な両手へ視線を移した。

水に濡れた所は、日に照ってキラキラしている。

そこだけ、綺麗に見えた。

例え、カエンにその意図が無かったとしても。

気紛れなのだと、分かっている。

水面のキラキラした光とその笑みが眩しくて、僕はまた目を逸らす。

だって、あんまりにも眩しかった。

ずっと見ていたら、この顔にある痣ごと焼け爛れて消えてしまっ
そうだった。

だから、僕は、太陽から目を逸らした。

+++

カエンは、毎日来るわけじゃない。

カエンがやって来なかったその日、僕は一人森の中を歩いていた。夜、雨が降ったんだろうか。湿った香りがする。

嫌いじゃないその香りの中を、ぼんやりと歩いた。

森の奥で張り詰める、凜とした空気は嫌いじゃない。

とても清浄なその空気は、吸い込めばこの体を内側から作り変えてくれそうだ。

清らかとは言えなくても、少しは汚れの薄まった体になれそうだななんて考える。

実際には、雪の中に落とした墨みたいに醜さが目立つただけだと、分かっていた。

それでもこの空気が嫌いじゃないから、僕は森を歩く。

静かな静かな森の中には、僕が立てる足音ぐらいしか聞こえない。

「……ふえ……っ」

だから、か細いその泣き声が、酷く大きく聞こえた。

驚いて足を止め、片方しか開いていない視界で周囲を見回して、それがすぐ傍の茂みからだと分かった。

子供の声だ。

小さな小さな、赤ちゃんの声だ。

何で、こんな所に？

戸惑いながら、そっと茂みに近付く。

そこには、小さな子供が座っていた。

柔らかそうな薄緑色の髪は産毛みたいで、ぷくぷくした白い頬だ。淡い色の肌着を着ているその子はすごく小さくて、涙混じりの大きな目で、晴れ渡った空を睨んでいた。

「……うー……っ」

小さいのに、泣くのを堪えるように歯を食い縛っている。

でも、涙はその深緑の瞳から幾つも零れて、その腕や服を濡らしていた。

何の精霊の子なんだろう。

額にある石は淡い緑色だから、草か花か、それとも風だろうか。

考えている内に踏み出してしまったらしく、僕の足下で茂みが揺れて音がたった。

それに気付いて、小さな子供がこっちを向く。

ほんの少しの沈黙の間、僕達はじっと見つめ合ってしまった。

「……あうー」

それから、につこりと笑う子供。

抱き上げてくれと言いたげに、甘えるようにその手を伸ばして。

苦しくて、僕はそれに応じてあげられない。

まるで酸素が薄くなったみたいだ。

苦しい。

この子がこんな風に笑ってくれるのは、僕が誰なのかを知らないからだ。

まだ理解できないくらい幼いからだ。

だったら、触れられない。触れられる筈が無い。

もしも、僕のことを憶えていて。

僕が『忌み子』だと知って。

この愛らしい子供の瞳が、いつか軽蔑と侮蔑と恐れを宿したら。
それが、とても恐い。

体中竦んで身動き一つとれない僕に、不思議そうに首を傾げて、
子供がぎこちなく立ち上がる。

頭が重たそうな小さい体で、それでも立ち上がって、ふらふらと
蛇行しながら僕へ近付いてくる。

「うー」

にこにこ笑って、また僕へ手を伸ばす。

駄目だ。

苦しい。

やめて。

「……ああ、やっと見つけた」

小さな子供が僕へ触るその直前に突然風が吹いて、声が空から降
って落ちた。

顔を上げると、ほっとした顔で笑う男の人が、宙に浮いていた。

長い黒髪。空色の瞳。穏やかな微笑みの、風の精霊。

セイクウ様だ。

見上げる僕の視線を受け止めながら、セイクウ様は浮遊したまま
子供を拾い上げ、その広い胸に抱き込んだ。

「心配したぞ？　まだまっすぐ歩けもしないのに、勝手に飛び回る
んだから。わんぱくだねお前は」

叱る、というよりは面白がる顔で、セイクウ様は子供の顔を覗き込む。

そして、その子のあどけない顔に苦笑してから、ふと僕へ目を向けた。

「おはよう、ウテンの養い子。散歩かな？」

そよ風みたいな、柔らかい声。

優しい瞳と、穏やかな笑み。

それが見ていられなくて、目を伏せる。

「ああ、紹介しようかな。この子は僕の息子。フウキって言うんだ」

可愛いだろう？ と囁く柔らかな声音が聞こえる。

そうか、あの子はセイクウ様の御息だったんだ。

思いながら、どうにか努力して、そっと目を上げた。

目の前にあるのは、笑みだ。

柔らかで優しい暖かな、笑み。

喉の奥を何かが鬱いってしまったように、息が辛い。

苦しい。

怖い。

「……どうしたんだい？」

あからさまに顔色を変えてしまったんだろう。戸惑ったセイクウ様が、心配そうに訊ねた。

それすら、怖い。

怖い。

僕は、首を左右に振ってなんでもないと意思表示し、そして大きく頭を下げた。

それから踵を返し、走り出す。

あんなにも優しいあの人から、離れたかった。

恐い。

恐い。

恐い。

ウテン様の言葉もあの子の目も、カエンの笑みも、僕は恐かった。
どうしてそんなに優しくするのかと、不思議でなかった。

あの日ほかの人たちがそうしたように、後でこの手から取り上げるのに。

どうして。

「……っ」

闇雲に、僕は走った。

帰り道が分からなくなっても構わない。

とにかく走った。

森の中は、木や草が生い茂っていた。

だから、分からなかった。

ただひたすら走り続けて、更に前へと踏み込んだ、その足の下に
大地が無いなんて。

一瞬、僕は空を飛べたのだったろうかと、そんなどうでもいい事
を考えた。

+++

がんと、頭が痛くて目を開ける。

目の前には、空と崖があった。

崖は結構な高さだ。

あんな所から落ちたら死ぬかも知れないな、なんて考えてから、辺りに漂う血の臭いに築く。

ああ、そうか。僕は、あそこから落ちたのか。

頭が痛いから、多分頭を打ったんだろう。

でも、僕は死んでいない。高さは足りないらしい。

思い、起き上がるうとして、体に力が入らないことに気付く。

何だか、背中も痛い。

どうにか動く目だけを、きょろりと動かしだす。

茶色く変色して乾涸びた少し丈のある草花の上に、赤黒い醜悪な液体が広がっていた。

僕の血だ。

多分、頭をぶつけた時に出たんだろう。自覚すると、頭の痛みが酷くなった。

結構、傷は大きいかもしれない。

僕の体から拳程度の幅までの周囲は、草花が全て枯れ萎れていた。血を浴びている所も、そうでない所もだ。

一生懸命努力して右手を動かし、まだ青々としている草に触れる。すると、すぐにそれも枯れた。

代わりに、ほんの少しだけ、体の痛みが和らぐ。

茶色くしおれたそれを見ながら、溜息を一つ吐いた。

死なないのなら、僕は犬吠をするべきじゃないのだと、改めて思う。

昔から、こうなのだ。

僕が生まれて、何処かに捨てられて、一人だった頃からだ。

周りの人達は無憫に思っ、優しくしてくれた。

僕は魔法石が無くて痣があっ、精霊かどうか怪しい見てくれだったけれど、それでも優しくしてくれる人達は居たんだ。

でも、あの日。

あの日、僕は、とても大きな怪我をした。
そして、助けてくれた優しい人達を、殺しかけたのだ。

「……っ」

僕には、奇妙な能力がある。

自分が負った傷を、周囲から奪ったエネルギーによって治すのだ。
あの時は、草や花では無かった。

死にかけたこの身が欲しがったのは、精霊の体を流れるエネルギー
だった。

精霊の証も無くて、呪われた術と力を持つ、忌み子。
怪我をしなければ害を及ぼしたりしない、とは思う。
けど、本当にそうかは分からない。

触られたら、すぐにエネルギーを絞り取られて死んじゃうのかも
知れない。

優しくかった人達は、みんな、僕から離れていった。

事情を知らぬ子供達は、大人が全て僕から遠避けた。

一人になってしまった僕を、引き取ってくれたのはウテン様だっ
た。

優しい方だと、思う。

でも。

でも、だから、恐い。

あの、差し出して貰えた掌が。

あの、向けて貰えた笑顔が。

ある日突然憎悪と共に向けられたら、僕はきつと絶望する。

あの時みたいに。

周り全てに憎悪しか見つけられなかった、あの日みたいに。
でも、きつと、それはいつか起こることだ。

僕はゆっくりと体から力を抜いた。

ずきずきと体が痛む。頭から足の先まで、あちらこちら怪我をしているのかもしれない。

誰かが僕を見つける前に意識を失いそうだなと、そんな風に思った。

ここが何処なのかは分からないけれど、森の中で、それも多分奥の方で。

きっと、誰も僕を見つけたりなんてしない。

世界に僕は必要無いから、僕を誰かが見つける偶然なんて起きないに違いない。

それでいい気がした。

後何時間も、何日も、何年も、あの館の中で怯えるのはつらい。

いつか見捨てられるのだと、それは確信できたから、その瞬間を怯えるのがつらい。

だったら、さっさとここで終わらせてしまっただろうか。

そうだ。

そうだ、それが良い。

思いながら目を閉じる。

汚らしい暗闇に一瞬力エンの顔が浮かんで、彼が血まみれの僕を見て顔をしかめたら悲しいなと、ふとそんなことを考えたのを最後に。

僕の意識は、闇の底へ沈んで溶けた。

+++

「おい、大丈夫か？」

そんな声に意識を揺り起こされて、僕は目を開けた。体中が痛い。頭が、特に痛い。

ああ、そういうえば高いところから落ちたのだっけ。

ぼんやりと思いながら見上げた視界の中に、逆さまの顔が映っている。

誰だろうか。

色々な緑色がその房ごとに分かれて複雑な色合いを出している髪に、エメラルドの瞳。浅黒い肌。

見たことの無い顔だった。

僕に近付いてくるなんて、この子は僕の事を知らないのだろうか。折角、顔半分を隠すような包帯を巻いて、僕の顔を知らない人が見ても分かるようにしているのに。

僕は忌み子です。近付かないで下さい。

そう言っただけで歩いている自覚があったのだけれど、まだ足りなかったのだろうか。

彼は屈み、何かを言う。けれど酷くその音は遠くて、よく聞き取れない。

申し訳なくて眉を寄せると、彼の色の黒い手が僕へと伸びた。

驚いて、目を見張る。

触る気だろうか。

止めたいけれど、声を出したらこの子は不快になるだろう。どうにか退こうと体を動かして、走った痛みにも息を詰める。尋常じゃないくらい痛い。

僕の様子を見てか、彼は僕へ触れる前にその手を止めた。

それから立ち上がって、また、何かを言う。

ばたばたと音がしたと思ったら、走っていく。

逃げ出してくれたのだと気付いて、知らず竦っていた力が抜けた。きっと、僕が忌み子だと気付いたのだ。良かった。

苦しめなくて、殺さなくて、本当に良かった。

痛む掌を握って、息を吐く。

頭は動かせないくらいに痛い。

こんなに痛いのでは、あの子が触ったら、きっとあの子の体を巡るエネルギーの全てを僕は吸収してしまっただろう。

そんなことが起こったら、きっと、子供なんて死んでしまう。そんなことが起きなくて良かった。

ここを子供が通りかかるなんて思わなかったけど、もう大丈夫。あの子はもう、ここへは来ないだろう。

思いながら目を閉じる。

すぐにやってきた睡魔は、何だか恐ろしいくらいに冷たかった。

+++

「……こっち、こっち！」

また、声に起こされた。

今度は、多分僕に向けられた物じゃない。

よく人の通る場所だったのかと、眉を寄せながら目を開ける。

度々人を不快にさせるのは、僕だって嫌だ。

開いた片目の世界で、さっきの子供がこっちへと走って来ていた。後ろに、二人くらい人を連れている。

どうして戻ってきたのだろうか。

思いながらその後方から続く二人の内の一人を見て、僕は目を見開いた。

「チノさん……！」

カエンだ。

大地の色に似た髪を振り乱した彼は、僕の方へと駆け寄って、僕の傍へ屈んだ。

顔が青い。どうしたのだろうか。

カエンは僕へと手を伸ばし、でも触れる前に止めて、後ろを見る。僕もつられてそちらを見て、そこに立っているその子供に気付いた。

さっきの男の子が連れて来た二人の内の、カエンでなかった方だ。水色の髪をした、水の精霊の子供だった。耳が魚のヒレみたいだ。綺麗だなと思いながら、湖の深いところと同じ色をしたその目を見る。

男の子だろうか、女の子だろうか。

水の精霊は生まれた時は両性だと本で読んだけど、このくらいの年齢だったら性分化は終わっているはずだ。

「なあスイキい、早く治してやってよ」

ソプラノの声をした男の子がそう呼んで、その子がスイキと言うらしい、と知る。

彼もしくは彼女が頷いて、僕へと近付いた。

白くて細い指が、屈んだその子から伸ばされる。

触れるか触れないかのところで止まったその手には、指と指の間に薄く皮膜があった。水かきだ。

何か、暖かいものが、その掌から発される。

その暖かさは傷に染みて、そして優しく、穏やかな流れだった

けれど、そんなことに気を取られてる場合じゃなかった。

だって、その指は僕の肌や髪や血の傍にあるのだ。少しでも身動けば触れてしまうほどに近くにだ。

綺麗なこの指が汚れてしまったらと思うと、気が気じゃない。

それに、苦しそうな顔をしている。

傷を治したがつている僕の体が、僕の意味などお構いなしに、この子の体からエネルギーを搾取しているのだ。

「……おい、スイキ、大丈夫か？」

肌の黒い男の子が、心配そうに友達へと近寄る。

それを合図にして、スイキと言う名前のその子は自分を僕から引き剥がした。尻餅を付いて、僕から離れる。

きつと驚いただろうと思いつつながら見つめたその瞳には、けれど僕が慣れ親しんでいた視線とは違うものが宿っていた。

申し訳なさそうなその瞳に、そつと瞬きをする。

どうしてだろう。

僕が忌み子だと、分かった筈だ。

分からなくても、普通じゃないと、感じた筈だ。

なのに、どうして。

「……すまない」

君は何もしていないのに。

「なあ、治った？」

男の子が、友達へ近付いて言う。

スイキという名前のその子は、首を横に振り、男の子からそつと離れた。

「血を止めて、痛みを消して……それで、精一杯だ」

応急処置、という奴だろうか。

そういえば、その指に気を取られて忘れていたけれど、痛みが大分無くなっている。これが、彼もしくは彼女の力なのだろうか。

「……まだ、動かしたら危険かも知れない。父様を呼んだ方が良いな」

僕を見てから、スイキはそう言った。

そして、男の子を手振りで促す。

「行くぞ、モクカ。急げ」

「あ、うん。ヤカン……じゃなかった、カエン。ちゃんと看てるよ！」

「……ああ」

何だか良く分からない会話をして、スイキと言う名前の子供と、モクカと言らしい肌の黒い男の子が走り去り、後には僕とカエンが残された。

「……チノ、さん」

カエンが、囁きながら僕の方へと体を寄せた。

膝が、汚い血溜まりに触れて汚れる。

けれど、それすら厭わない様子で、カエンは僕の顔を覗き込んだ。

「……チノ、さん。……チノ……チノ……ッ！」

泣いてしまいそうな炎色の瞳が、僕を見た。

その手が伸びて、しっかりと僕の頬に触れる。

驚いて、僕は身を振った。まだあちらこちら痛いけれど、さっきより全然まだ。

起き上がって、彼の手から逃れるために後退る。

その時に触れた植物が枯れたのが、感触で分かった。

嫌な思いをさせるだろうと申し訳なく思いながら、けれど近付こうとする彼を制止する為に、ずいぶん久しぶりに口を開く。

吐き出した言葉は喉に絡んで、みっともなく掠れた。

「さ……わら、な……い、で」

「……チノ……」

「ぼ、僕に……さわ、さわら、ない、で」

どうか、お願いと。

それはただの懇願だった。

僕は今、怪我をしている。血も多分、足りない。

体が求めるエネルギーは、カエンの幼い体のもものでは全然足りない。きっと、吸い尽くす筈だ。

制御は出来ない。

出来たら、こんなに恐ろしくはない。

だから、触らないで欲しい。

カエンは、座ったまま、黙っていた。

「……」

そして、枯れた草花を見て。
その上に広がる、血液を見て。
さつきしんなりと枯れた草を、覗いて。
僕を見て。

「……言うこと、ききたくない」

まっすぐな目をして、そう言った。
その手が、僕の方へと伸びる。

「きかない」

宣言したカエンの声を、僕は耳元で聞いた。

僕は、抱き締められていた。
驚いて体を動かすけれど、カエンは離してくれない。それどころか、その腕に力が入る。

苦しそうな息遣いが聞こえ出した。やっぱり、僕はカエンのエネルギーを吸い出しているのだ。

「……はな、れ、て……！」

慌てて、更に身を振る。もがく。
それでも、カエンはその腕を緩めない。
ただひたすら、僕を抱き締める。

どうしよう。

どうしよう。

どうしよう！

焦って、怖くて、僕は目を潤ませた。
無理矢理体の間に手を入れて、申し訳ないけれどカエンの胸を強

く押しやった。

けれど、傷で力が出ないのか、元々非力だからか、カエンはびくともしない。

「やめ、て……！」

君が死んだらどうするのだ。

殺したら、どうしたらいいのだ。

短い時間、僕とカエンの中で攻防があつて、それから暫くして、カエンが体を離れた。

僕は殆ど自由を取り戻したけれど、カエンの手がまだ僕の左腕を捕まえていることに気付く。

引っ張つても、離れない。

泣き出したい気分になりながら、カエンを見る。

「……！」

放して、と言うつもりだった。

けれどそれを飲み込ませたのは、カエンの笑みだった。

柔らかで暖かで優しいげな、僕が一番怖いと思う、穏やかな笑み。体を強張らせた僕の腕から、ゆっくりとカエンの手が離れていく。

「……楽に、なった？」

囁きは、優しい。

とても優しい。

「少しでも、楽に、なった？」

その問いは、そのまま僕へ衝撃を与えた。

それは、つまり。

「……知って……？」

僕の、この特異な体質を、知っているのはごく一部のはずなのに。カエンは、微笑んでいる。

穏やかで暖かで優しいが、僕が得体の知れない化け物だと、分かっ
つていて向けてくれる笑顔。

僕のことを知っているのなら、その笑みは、今までの行動は全て、
憐れみだったのだろうか。

僕に話しかけたのも僕を外へ誘ったのも僕に構ったのも僕を抱き
締めたのも、全部全部全部。
全てが？

「……」

ありがたいことの筈だった。

憐憫だなんて、そんな感情を、こんな僕へ向けてくれるなんて。
なのに、なんで。

「……っ」

どうして、涙が出るのだろうか。

苦しい。

苦しい。

苦しかった。

胸が潰れてしまったみたいだ。

突然泣き出してしまった僕を、カエンが眺めている。

いつかと逆だと、僕は思った。

丘の上で泣いているカエンの傍に僕が居た時と、丁度逆だ。

カエンが、また手を伸ばしてきた。

触れられるのを避けたくて僕は逃げようとしたけれど、その前にカエンの指が僕の頬に添えられていた。

流れ落ちた僕の涙を拭うように、その指は動く。

その手には力が無くて、やっぱり彼のエネルギーを相当奪ってしまったのだらうと、僕は自覚した。今だってたぶん、そうだ。

「……なあ、チノ」

少し口調の違うカエンが、口を開く。少し砕けた感じだ。

今までが他人行儀だったのか。それとも、罵る為の下準備だろうか。

その業火色の瞳に憎悪や嫌悪を見つけるのが怖くて、僕は強く目を閉じた。離れて欲しくて、彼の指から顔を背ける。

今度は簡単に、それは離れた。

カエンが囁く。

「良かったな」

ぽつん、と。

投げて寄越されたその言葉の意味が分からなくて、僕は目を開く。目の前にあったのは、優しい瞳と、悪意の欠片も無い暖かな笑みだ。

「全部に好かれるなんて、凄いことだ。よかったな、チノ」

カエンは繰り返す。

やっぱり、分らない。

「……全部？」

恐る恐る問うと、カエンは大きく頷いた。

「大地も、風も、草も、火も、光も……全部だ。全部が、チノの事が大好きなんだって、教わった」

「だい、すき？」

それは、僕にはなじみの無い単語だった。
だいすき。

すき。

好き？

全てが？

誰を。

僕を？

「……あり、え、ない」

ゆるゆると首を振る。

有り得ない。

だって、僕は呪われている。

他者のエネルギーを吸い取って殺してしまうような、身勝手な化け物なのだ。

どうして、そんな僕を好きだというような存在がいるだろう。

否定する僕に、カエンは言う。

「精霊の属性は、額の魔法石で決まるだろ？」

言葉に、今度は頷いた。

知っている。精霊は、皆、額に魔法石を持っている。生まれた時

からだ。それによつて、司る力が変わる。

そして、その精霊の証を、僕は持つていない。

僕は異端の呪いを受けた子供だから。

「でも、チノにはそれが無い」

こくんと、また一つ頷く。

「だから。チノは、司る力を遮つて仕分けるものが無いから、全てが使えるんだよ」

僕は、じつと力エンを見た。

子供を騙す理屈を言つた子供が、信じてないだろう、と眉を寄せる。

「冗談じゃないぞ？ ほら、チノ。手を貸して？」

言葉と共に力無い手が手首を掴み、枯れた草の上に導かれる。

「こいつが、もう一度上を向けるように、願つてみて？」

それは、草や花の精霊の仕事だ。

僕は首を振る。

なのに、大丈夫だから、と力エンは囁いた。

「少しだけでも、良いからさ。な？」

僕は力エンを見た。

力エンは笑っている。

でも、手を離してはくれない。

言う通りにしないと、きつとずっと、この手はそのままだ。

まだ、僕の怪我は完全に治っていないのに、そうやって触り続けていたら、あの日のように、きつとカエンも倒れてしまう。

だから、僕は目を閉じた。

茶色に変色して枯れたその草が、首をもたげ、色を取り戻し、空へ向かって起き上がるように。

ただ、そう願った。

「……………もう、良いよ」

少しの沈黙の後、カエンがそう声を掛けた。
だから、目を開ける。

「……………！」

そこには、青々として佇む、僕が枯らしてしまった筈の草があった。

「凄いよな。これが、チノの力なんだって」

驚いている僕へ告げて、カエンは僕の手を離れた。

僕は、ただ、呆然と、草を見つめる。

僕が蘇らせた、それを見つめる。

「……………俺、チノが結構、大切なんだ」

そんな言葉が耳を打った。

驚いて視線を向けた先では、カエンが微笑んで僕を見ていた。

「怪我してるって聞いて、どうしようかと、思った」

怖かったと、呟く声には真実が混じっているみたいで。

「助かってくれて、良かった」

まだ完全には治っていないけれど、それでも彼がやって来た時よりは回復している僕を見ながら、カエンは言う。

そして、糸が切れたみたいに横へ倒れた。その顔は青くて、疲れきって見える。

「……ごめんな、チノ。本当は、全部あげても良いんだけどさ」

恐ろしいことを言いながら、カエンはそれでも笑っていた。それは、とても眩しい。

「チノが自分を責めて泣くなんて嫌だから、止めとくな」

声も、優しい。

いつかそれがひっくり返ったらと思うと、とても怖い。

酷い言葉を吐かれて、嫌悪と侮蔑の眼差しを向けられた日を思い出せば、背中がぞくりと震えた。けれど。

「……うん。そう、して」

そっと囁きながら、彼を見つめる。

カエンは、少し目を丸くしてから、今度は嬉しそうに笑った。

その笑みは、やっぱりとても眩しい。

でも、僕は目を逸らさなかった。

+++

傷付きたくなくて
傷つけられたくなくて

拒んでいたけれど

強く強く閉じた目を
強く強く抱えた膝を

そつと、ほどいて

いくらこぼしても良いからと言って
この掌へ与えてくれる優しさを
全部拒んできた それらを

出来れば 今

受け取っても良いのだろうか

目の前で笑っている 君の 優しさを

この手で受け取ってみても 良いだろうか

+++

少しして。

身動きした重傷人の僕と、無茶をして倒れていたカエンは、駆けつけてきた>水王<様に、とても怒られた。

……初めて、叱られた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5397p/>

精霊の子供の話(チノ)

2010年12月25日18時28分発行